

## ポピュラー音楽の楽曲分析における編曲の重要性 ——1970年代の筒美京平作品を例にして

樋口萌音 愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻（音楽学コース）

### 要旨

本論文の目的は、ポピュラー音楽の楽曲分析において、メインボーカルやコードだけではなく、伴奏にも注目していくこと、つまり編曲に注目していくことの重要性を明らかにすることである。

メインボーカル以外のコーラスや楽器による伴奏によって、その楽曲の持つ特徴は大きく変化する。よって、楽曲分析をする上では、全てのパートすなわち編曲も考慮する必要がある。日本国内のポピュラー音楽を分析した先行研究は多く存在するものの、編曲を主眼において日本のポピュラー音楽を分析した先行研究はない。そこで、本研究では1960年代後半から職業作曲家として活躍した筒美京平（1940-2020）の1970年代の作品を事例として、編曲に主眼をおいた分析を行う。

本論文は、全2章から構成されている。

第1章「分析対象について」では、本研究における分析の対象や方法について述べた。第1節では、分析を行う上で、楽曲を構成している全ての音が重要であり、それはポピュラー音楽においても言えるということを提示した。レコードの音源やTVで放映されていた音源については、その楽曲を構成する全ての音が含まれている上、多くの聴衆はそれを聴くことでその楽曲のイメージを形成していったと考えられることから、分析対象として適切であることについても言及した。また、本研究の目的のためには、ポピュラー音楽の楽曲における伴奏を含む全てのパートがどのような特徴を持っているのかを分析し、その結果を示す必要がある。分析結果を示す手段の1つとして楽譜があるが、演奏されている全ての音を網羅している楽譜は、一般に公開されていない。そこで第2節では、本研究において、楽曲の音源を聴いて書いたスコア、すなわち採譜をした楽譜をもとに分析を行うべきであることを示した。第3節では、本研究の目的や前節までに挙げた方法などから、分析対象の楽曲に求められる条件に

ついて検討し、本研究の事例として筒美京平の1970年代の作品を選んだ理由について述べた。分析対象の楽曲に求められる条件として、音源が入手できる楽曲であること、西洋音楽で一般的に用いられている楽譜で表現することができる楽曲であること、当時の聴衆に受け入れられたと考えられる楽曲であることの3点が挙げられ、それらの条件を全て満たすことから、本研究の事例として、筒美京平の1970年代の作品を扱う。

第2章「楽曲分析」では、分析対象とする筒美京平についての基本情報を概観した上で、3曲の分析を行った。第1節では、筒美京平について、彼の生涯や手がけた作品の売上記録や受賞記録を示した。第2節では、尾崎紀世彦《また逢う日まで》(1971)、郷ひろみ《男の子女の子》(1972)、ジュディ・オング《魅せられて》(1979)の分析を行い、各曲の特徴と複数の曲に共通して見られる特徴を示した。分析の結果、以下のような特徴を見出すことができた。まず、前奏やいわゆるサビの部分など、楽曲の中で特に大切な部分において、伴奏が同じ音形を繰り返したりユニゾンになっていたりすることで、より聴衆の印象に残りやすくなっている。また、メインボーカルによるメロディーが何度も繰り返し登場する部分においては、伴奏の使用楽器や演奏するフレーズが変化していくことにより、メインボーカルで同じメロディーが繰り返されていても楽曲の中で少しずつ雰囲気が変化していく為、聴衆が飽きないようにしている。つまり、編曲に注目することで、伴奏が、聴衆の印象に残りやすく、途中で飽きがこない楽曲を形成する上で重要な役割を果たしていることがわかった。

以上のことから、ポピュラー音楽の楽曲分析において、メインボーカル以外のコーラスや楽器による伴奏、すなわち編曲に注目することは重要であるということが明らかになることができた。